

## 月が照らす『竹取物語』の可能性

### —「月」に着目した『竹取物語』の指導—

朝川 明日香

#### 1. 問題の所在と研究の目的

「物語の出で来はじめの祖」との呼び名を持つ、日本で最も古い物語—『竹取物語』。この作品について、『日本古典文学大辞典』では「物語文学の始発的存在としてこの作り物語の意義は大きい。」と記されている(注1)。また、野口元広(1979)は「日本人にとって古典中の古典である」と述べている(注2)。我が国の文学史上重要な作品であり現代の我々にとっても馴染み深い『竹取物語』はまた、小学校3社3冊・中学校5社5冊・高等学校10社33冊(国語総合8社15冊, 古典B8社14冊, 古典A3社4冊)計41冊の現行国語教科書に採録されており、一人の人生で三度程学習経験を持つ“古典定番教材”としても確固たる位置を築いている。

『竹取物語』教材は、昔話「かぐや姫」と直結させての指導が多々見られる。学習者が幼少期に慣れ親しんできたであろう昔話「かぐや姫」と結び付け、『竹取物語』を身近なものとして親しませようとする教材の様相は、古典への拒否反応を喚起しないという配慮故であろう。しかし、竹村信治(2002)は、『竹取物語』の授業において『竹取物語』を童話・絵本の「かぐや姫のお話」への還元ではなく、それとは異なる言語宇宙を構成している一テキストとして相手取る」ことの必要性を指摘、古典文学作品としての『竹取物語』に親しむ態度は、昔話「かぐや姫」との“身近さ”を強調するばかりでは身につかないと主張している(注3)。関連して、先の野口(1979)も「現代のかぐや姫の物語は、幼童のための、あるいは幼い日への郷愁をもつぱらにした童話であって、古典作品の実質はとり逃がさ

れてしまっているのではないかと危惧している（注4）。以上の論を踏まえると、『竹取物語』教材を指導する際には、昔話「かぐや姫」への還元ばかりを強調するのではなく、『竹取物語』を一テキストとして扱う必要があると考えられる。

では、『竹取物語』を一テキストとして扱うとき、どこに着目した指導をすればよいのだろうか。学習者が真に“古典文学作品『竹取物語』”に親しめる指導とは具体的にどのようなものだろうか。これらの問題を出発点に、『竹取物語』教材の新たな指導の可能性を見出すことが、本研究の目的である。

## 2. 研究の方法と成果

本研究の方法と成果の概要を以下にまとめる。

本研究では、はじめに新潮社・岩波書店・小学館3社の注釈書における『竹取物語』の章段分けに着目して物語の構造を挿んだ（注5）。その結果、『竹取物語』は幾つかの伝承説話の話型を基盤に据え、古い説話に一般的な語り出し（「今は昔……」）や助動詞「けり」を用いて、物語が民間で「伝承されてきた」話であることを強調する構造を持っていることが明らかになった。しかし同時に、『竹取物語』が「伝承されてきた」話に独自の肉付けを行うことで、伝承説話の話型を超越し、物語文学という新しいジャンルを切り拓いたということも明らかになった。

そこで、伝承説話の話型との相違点を探ることで『竹取物語』の本質に迫っていくという見通しを立て、二者の比較考察を行った。結果として、『竹取物語』は「人間界」の現実そしてそこで生きる「人間」に焦点を当てている物語であること、更にそれを可能にしているのは「人間界」と対峙・隔絶する異郷＝「月」の都であることを指摘するに至った。

では、何故『竹取物語』の本質を支える異郷が「月」の都なのか、何故「天」ではなく「月」なのか。上記の疑問を解くため、まず和歌（万葉集・古今和歌集）・漢籍（主に漢詩）における「月」の表象や「月」の両義性、また「月」に関する風習を追った。その結果を基に、「月」に着目して『竹取物語』を再読し、『竹取物語』における「月」の意義と表現効果について考察を進めた。結果、「月」の表象と両義性（「愛でる」／「忌む」）は『竹

取物語』を読解する上での鍵として物語内に散りばめられていることを指摘するに至った。

『竹取物語』における「月」の表現効果が『竹取物語』以降の文学作品にも摂取されているという先行研究での指摘を基に(注6)、国語教科書中の文学教材『たぬきの糸車』『ごんぎつね』『黄色いバケツ』(小学校)『山月記』(高等学校)に登場する「月」の表現効果と『竹取物語』における「月」の表現効果との共通性を考察した。結果、①愛別離苦を美しく描き出し心に迫る切なさを彩る「月」、②自己存在の揺れに葛藤し苦しむ主人公(特に異類)を冷ややかに照らし出す「月」という二点の共通性を指摘するに至った。

以上の結果を踏まえ、「月」という視点から『竹取物語』教材の指導を構築できるのではないかという仮説を立てた。仮説を検証するため、まず国語教科書における『竹取物語』教材の採録状況調査及び分析を行った。結果、『竹取物語』は古典定番教材であるため、小・中・高等学校間での学習内容の重複を避けるように採録箇所や学習活動が系統立てられている点を特徴として指摘するに至った。一方、「月」の表現効果や意義については触れられることがなく、「月」の視点が見落とされている点を課題として挙げる事ができた。この結果に基づいて、「月」に着目した『竹取物語』の指導をその有効性ととも提唱し、本論の結びとした。

本研究の成果は、『竹取物語』教材の指導の新たな可能性として、「月」という新しい視点を提唱するに至ったことである。「月」に着目した『竹取物語』の指導の有効性について、以下二点を提唱することができた。

① 学習者が『竹取物語』の読解を深めることができる。

② 学習者が『竹取物語』以外の古典作品(和歌や漢詩文を含む)や近代以降の文学作品における「月」の表現及び「月」に関する伝統文化へ興味・関心を拡大し、現代を生きる自らとの関わりの中に『竹取物語』を位置付けることができる。

なお、本稿では以下『竹取物語』における「月」の意義、「月」に着目した『竹取物語』の再読結果を取り上げ、上記の有効性①(下線部)について具体的に提唱する。

### 3. 『竹取物語』における「月」

### 3.1 『竹取物語』における「月」の意義

『竹取物語』における「月」の意義は、以下の二点であると考えられる。

- ①「月」の表象が「月」の都の造形の基となっている。
- ②「月」の両義性が「人間界」と「月」の都の対峙・隔絶関係の基となっている。

まず、①について述べる。『竹取物語』における「月」の都は、光り輝く美しい世界である。無憂で不老不死、煩惱から解放され、理性的な世界—それらは「浄土」をイメージさせるものである。対して「人間界」は、迷い思い悩むことがあり、煩惱に縛られる感情的な世界であり、さらに人間は最後に老いて死ぬ—「月」の都が「浄土」であるのに対し、「人間界」は「穢土」である。つまり、二つの世界は対峙するものとして描かれているのである（【表1】参照）。

【表1：「月」の都と「人間界」の様相】

「月」の都	「人間界」
超自然的な魔力 支配 優位	自然 被支配 劣位
光り輝く美しい世界 浄土（清浄）	罪深い地 穢土（不浄，穢れ）
物思いがない（無憂，思い悩まない） 煩惱からの解放 理性的	物思いがある（迷い，思い悩む） 煩惱がある 感情的
不老不死	老いて死ぬ
かた時	あまたの時

岡崎祥子(2009)は『竹取物語』における「月」の都の役割について、次のように述べている（注7）。なお、「地上」とは「人間界」と同義である。

『竹取物語』では、「月の都」と「地上」とが二つの世界として存在し、互いの違いが明確に描かれている。「月の都」は、その性格を以

て「地上」の性格を浮き彫りにし、対比されることで「地上」の現実を読者に実感させる役割を担っているといえるのである。

このように、『竹取物語』は「人間界」と端的に対峙・隔絶する「月」の都という理想郷を取り入れて「人間界」という現実を照らし出すという構図を持つのだが、その理想郷「月」の都の様相と和歌・漢籍の調査から得られた「月」の表象とを対応させると、下の【表2】のようになる。

【表2：「月」の都と「月」の表象の対応】

月の都	月
超自然的な魔力 支配 優位	……遙かな時間と空間を越える超越的存在、再生力と永遠性、神仙世界 ……人間の魂を奪い狂気に誘う光 ……王権の象徴、地上を照らすように降り注ぐ光 「日」と共に天と地、特に天皇によって治められた地上を照らす
光り輝く美しい世界 浄土（清浄）	……明るく輝く、清澄、冴えている、寒冷、色調は白 ……美しい嫦娥、美的対象としての兔が住む
物思いがない （無憂、思い悩まない） 煩惱からの解放 理性的	……人生の様々な感慨、特に悲哀・憂愁感情、孤独感や寂寥感を喚起する ……静かで内省的な冴えた光
不老不死	……変若水、桂の木、嫦娥・兔と仙薬→不老不死の神仙世界 盈虚から生じる再生力と永遠性
かた時	……永遠性

表に明らかなように、『竹取物語』における「月」の都は、幾つもの「月」の表象を複合的に内包した世界である。すなわち、「月」が持つ幾つもの表象が「月」の都の造形の基となっていると考えられる。

次に、「月」の意義②について述べる。「月」は人々にとって「愛でる」

つまり理想郷の面だけではなく、「忌む」面も持った両義的な存在であった。渡辺秀夫(1995)は次のように述べている(注8)。

「月」を神聖なものとして特殊視し、畏敬すべき対象とする制度的な観念は、光り輝くものへの畏怖という古代的感情に由来するのだが、これは、他方で、禁忌の対象としての月＝《月の顔見るは、忌むこと》という根強い俗信となって存在する。(中略)それは、正確にいえば、月そのものを見る行為に対する禁止ではなく、月から発せられる青白い光彩に身が曝される事態に対するタブー—そのことを意識した時に呼び覚まされる忌避感覚であったと思われる。

また先の岡崎も、古代の人々は「月」の盈虚の様子から不老不死で永遠の憧憬世界を思い描く一方で、人間の生を奪い死を与える存在としても「月」を捉えていたと指摘している(注9)。つまり、「月」の光は人々にとって神秘的な憧憬である一方、奇妙さや不気味さを感じさせるものとして忌まれるものでもあったということが窺える。

このような「月」の愛でる／忌むといった両義性が、「月」の表象を基盤に据える『竹取物語』内においても反映されている(【表3】参照)。

【表3：『竹取物語』における「月」の両義性】

	愛でる	忌む
月	・ 趣がある (「おもしろし」)	(「月の顔見るは、忌むこと」 「月なみたまひそ」) ・ かぐや姫を連れ去ってしまう 生を奪い、死を与える ・ かぐや姫の物思いを喚起する
月の都	・ 不老不死で 光り輝く理想郷	・ 畏怖の念を抱かせる (「物におそはるる」) ・ 人間の魂を奪い支配する
かぐや姫	・ 高貴な存在 ・ 霊力を持った神女 ・ 光り輝く美しい女性 (「けうら」)	・ 「人間界」の倫理秩序に背く 禁忌違反者、異人 ・ 求婚者たちの魂を奪い 狂気(異常な求婚行動)に導く

	・ 帝の光（皇権）を無力化 ・ 翁の老化
	・ 浄化、若返り作用

『竹取物語』における「月」,「月」の都,「月」の都の者であるかぐや姫に「月」の両義性,特に「忌む」面が付与されているからこそ,「人間界」と異郷「月」の都は対峙・隔絶することとなり,「人間界」に焦点を当てた物語が完成したのだと考える。もし,理想郷として愛でられる面だけを持っていたとするならば,「人間界」には目もくれられず,「月」の都に焦点が当てられていたのではないか。不老不死で無憂の世界である「月」—その背後には,老死・憂いがない無機質な世界といった「月」の捉え方が見え隠れしている。こうした不吉なものとして「忌む」面があった「月」だからこそ,『竹取物語』は「月」の都と「人間界」の隔絶によって作中人物や読者の生きる現実の「人間界」に焦点を当てることができたと考える。では,もし「忌む」面だけ持っていたとしたらどうか。理想郷としての「月」の都は存在しなくなる。人間の理想とする「月」の都があってこそ,それと対峙し隔絶する「人間界」を照らし出すことができると考える。つまり,『竹取物語』において理想郷としての「月」に不吉なものとして「忌む」面を付与することによって,「月」の理想を確かなものにすると同時に(「愛でる」),その理想を揺るがせ(「忌む」),「人間界」に焦点を当てていった。「月」の両義性は,『竹取物語』が従来 of 異郷そのものを語る伝承世界から脱し「人間界」を語る物語に成り得た要因であると考えられる。

### 3.2 「月」に着目した『竹取物語』の再読

以下,『竹取物語』成立付近の『万葉集』『古今和歌集』また唐詩を中心とする漢籍における「月」の表象,また「月」の両義性と八月十五夜の中秋の名月等の風習を基に,「月」に着目し物語を再読した結果を一部提示する。

#### ○清らかに光り輝くかぐや姫

「月」の都の象徴的存在・「月」の光の人格化として「人間界」に誕生したかぐや姫は(注10),翁と嫗に大切に育てられ,三ヵ月ほどで成人する。その後もかぐや姫が「帳の内よりもいささず」貴族の子女のように大切に扱われたのは,「月」が王権のシンボル・高貴なものの象徴であったように,

かぐや姫が高貴な存在として見なされていたからであろう。

彼女の容貌については、物語本文で次のように語られている。

①この兎のかたちの顕証なること世になく、②屋の内は暗き所なく光満ちたり。③翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。 (下線筆者)

下線部①では、かぐや姫の容貌が「顕証」と表されている。他二社の注釈書では「けうら」となっているが、いずれも最高美を表す語である。つまりかぐや姫は「月」の都から来たたいへん美しい女性なのであるが、ここに中国の「月」に昇った美しい女性・嫦娥の姿を重ね見ることができる。

下線部②によると、かぐや姫が纏う「月」の光は翁の家の隅々まで満ち満ちて暗い場所が無くなる程だったという。ここに、古代の夜の暗闇で空に輝く唯一の「月」の光を重ね合わせて見ることができる。また、満ち満ちている光から、「月」の中でも「望月」をイメージすることができる。さらにここでは、かぐや姫が自発的に家を輝き照らしているのではなく、彼女自身が「月」のように照り輝いているため自然と家が光で一杯になっていると捉えた方が適切であろう。

下線部③のように、かぐや姫の纏う光によって翁の気分が良くなり、苦しいことや腹立たしいことがまぎれるのは、清澄で一切の穢れもない「月」の光の浄化作用によるものだと考えられる。また、岩波書店注釈書の脚注には「実際に光り輝く靈力をもつ。翁の病氣や苦しみ・腹立ちなどが止むのも、姫の不思議な靈力のため」とあるが(注11)、光り輝く・不思議な靈力とは、超自然的な「月」の光の靈力であったと言える。

○「月」の光に魂を奪われ、狂気の渦に巻き込まれる求婚者たち

かぐや姫は美しく輝く「月」の光を一身に纏っているため、「なよ竹のかぐや姫」と命名される。彼女の噂を耳に入れた男たちは、次のように争って求婚をするようになる。

世界の男、あてなるも、賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしかな、見てしかなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きいも寝ず、闇の夜にいでても、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。(中略)人の物ともせぬ所に惑ひ歩けども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはむとて、いひかくれども、ことともせず。あたりを離れ

ぬ君達、夜を明かし、日を暮らす、多かり。

河添房江(1998)が、男たちの熱心な求婚について「異郷からの奇しき光を憧憬し、それを所有したいという渴望のあらわれであった」と指摘しているように(注12)、『竹取物語』における男たちの求婚は、憧れの世界である「月」に近づきたい、手に入れたいという人間の「月」に対する欲望の表れではなかったであろうか。

また、「月」の光は人々の魂を奪い狂気に導くものであった。男たちが、見たこともないかぐや姫に夢中になって狂気染みた求婚行動を繰り返しているのは、かぐや姫の纏う「月」の光のそうした性質によるものであったと考えられる。さらに着目したいのは、下線部「闇の夜」という表現である。というのも、新潮社注釈書の脚注では「月のない夜。ただ暗い夜の意味ではない。」と付されているからである(注13)。ここで「月」が妻問いの路を照らす存在であったことが思い出される。男たちにとって求婚の路を照らす「月」は必要不可欠な存在であっただろうが、その「月」は姿を見せていないのである。何故だろうか。筆者は、男たちの求婚に対する熱心さと狂気染みた行動を強調するためであると考え。月明かりがなく路が見えるはずもない闇夜を彷徨い求婚する男たちは、かぐや姫という「月」の光に魂を奪われ狂気の渦に巻き込まれていると捉えることができよう。  
○かぐや姫の自己存在の揺れを引き起こす「月」

「月」の光や「月」に着目し『竹取物語』を再読すると、特にかぐや姫の自己存在の揺れやそれに伴う苦悩をも見ることができた。『竹取物語』における「月」及び「月」の光はかぐや姫の自己存在を揺るがせるものとして作用している。かぐや姫が纏う「月」の光は、彼女が「月」の都の者であることの証明であり、「人間界」の倫理秩序に曝された時や人間との接触の中で人間的感情を獲得した時に弱まることはあっても、それと対峙するように光が強まったり「月」そのものが登場したりと、最後まで消えることがない。このように、自己存在の揺れを引き起こす「月」はまた、それに伴うかぐや姫の孤独感や寂しさ、苦悩つまり「物思い」(人間的感情)を喚起するものであった。かぐや姫は、「月」が登場すると一層自己存在に対する苦悩を募らせるのである。

関連して、高橋亨(1989)は『かぐや姫論—変化のもの』の中で、次のように述べている(注14)。

かぐや姫の心が人間化したのとうらはらに、「月の都の人」としての本性の自覚が強まっていた。それを決定的によびおこしたのが、表現としての「月」であった。かぐや姫が月を見てさめざめと泣くようになることから昇天までの劇的な構成は、それまで秘められていただけに、文章の法としてみごとに効果を示している。（下線筆者）

以上のように、『竹取物語』における「月」は、物語を読み解く際の鍵となる一つの「表現」である。

#### 4. 「月」に着目した『竹取物語』の指導の有効性

①学習者が『竹取物語』の読解を深めることができる。

物語内に散りばめられている表現としての「月」に着目することで、登場人物の心情把握や場面理解といった『竹取物語』の読解活動をより一層深めることができると考える。

例えば、『月の世界』と『地上の世界』とは、それぞれどのような世界として語られているか。表にまとめよう。「語り手が、地上の人にとってかけがえのないものと考えているのは何か。」(中学校・学校図書)「月の世界の様子がうかがわれる部分を抜き出し、そこがどのような世界か、想像してみよう。」(高等学校古典B・明治書院)という教科書中の問いに対して、「月」の両義性の視点を取り入れる。その際、漢籍における「月」に住む兔や嫦娥、蟾蜍の話や『竹取物語』本文中の「月の顔見るは、忌むこと」、関わって在原業平の「おおかたは月をも愛でじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの」(『古今和歌集』八七九)等、特に「忌む」面を取り入れて『竹取物語』の「月」の都が単なる憧憬の世界ではないという話を挟むだけでも、この問いに向かう学習者にとってのヒントになるだろう。また、「月の世界へ帰らねばならないかぐや姫は、どのようなことを嘆いているか。」(高等学校国語総合・筑摩書房)「かぐや姫の発言について、次のことを考えてみよう。かぐや姫が最も心にかけていることは何か。」(高等学校国語総合・第一学習社)という問いに対して、「月」の光とかぐや姫の本性を見た(「きと影になりぬ」)帝とかぐや姫が手紙での交流を続けて3年程経った時に「月」が登場し嘆きが始まるということを確認する。そのことで、学習者はかぐや姫の嘆きの本質つまり自らの本性と「人間界」に

対する愛着との狭間で苦しむかぐや姫の心情を読み取ることができよう。

特に、高等学校国語総合の「読むこと」領域の指導事項(ウ)「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと」に適用できると考える。学習指導要領では次のように解説されている(注15)。

「情景」とは、文章に描かれている場面や自然の風景を指すが、文学的な文章では人物の心情の反映や象徴、物事が起こる予兆などとして設定されることが多く、これを把握することは人物の言動、置かれている状況を理解する重要な手掛かりとなる。

また、次のような解説も見られる。

以下に示す指導事項は、近代以降の文章(明治時代以降に書かれた文章)ばかりでなく、古典にも該当する。古典の学習は、古文、漢文の現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない。古典を読むことへの意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。そのためにも、近代以降の文章と同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくことが大切である。 (下線筆者)

つまり、近代以降の文章を読むとき同様、表現としての「月」に着目して『竹取物語』を読む活動によって、古典を読むことに対する学習者の意欲が喚起されることも期待できる。

## 5. 「月」が照らす『竹取物語』指導の可能性

「月」への着目は、本研究が辿ってきたように、『竹取物語』の読解を深化させることも、その他の古典作品や近代以降の文学作品における「月」の表現効果や伝統文化へ拡大することもできる。「月」という切り口を提示するのが教師であったとしても、学習者自身で『竹取物語』の深化・拡大を進めることができるのではないだろうか。「月」が拓く『竹取物語』教材の門戸は広い。教師はその「月」という門戸が存在することを学習者に適切に工夫して提示する必要があるが、具体的な方法については学習者の実態に合わせて考えていきたい。「月」は、『竹取物語』の指導の新たな可能性を明るく照らしている。

【注】

- (1) 大曾根章介, 檜谷昭彦, 堀内秀晃他6名(2000)『日本古典文学大事典』明治書院 pp.779-780
- (2) 野口元大(1979)「解説 伝承から文学への飛翔」(『新潮日本古典集成(第二十六回)竹取物語』)新潮社 p.89
- (3) 竹村信治(2002)「翁の物語としての『竹取物語』—“古典”に親しむ”ために」(『国語教育研究』第45号)広島大学教育学部光葉会 p.69
- (4) 前掲(2)に同じ
- (5) 野口元大(1979)『新潮日本古典集成(第二十六回)竹取物語』新潮社  
堀内秀晃, 秋山虔(1997)『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』岩波書店  
片桐洋一他4名(1994)『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館
- (6) 川名淳子(2007)「『竹取物語』一月界からの使者」(『国文学』「文学の中の月」(特集:月光)第52巻第3号)學燈社 p.25
- (7) 岡崎祥子(2009)「竹取物語研究—かぐや姫の罪と罰をめぐって」(『岩大語文』Vol.14 岩手大学語文学会) p.15
- (8) 渡辺秀夫(1995)『詩歌の森—日本語のイメージ』大修館書店 pp.14-15
- (9) 岡崎祥子(2009)「竹取物語研究—かぐや姫の罪と罰をめぐって」(『岩大語文』Vol.14 岩手大学語文学会) p.12
- (10) 河添房江(1993)「かぐや姫—光と境界と外部」(『国文学 解釈と教材の研究』第38巻第4号)學燈社
- (11) 堀内秀晃, 秋山虔(1997)『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』岩波書店 pp.4-5
- (12) 河添房江(1993)「かぐや姫—光と境界と外部」(『国文学 解釈と教材の研究』第38巻第4号)學燈社 p.103
- (13) 野口元大(1979)『新潮日本古典集成(第二十六回)竹取物語』新潮社 p.11
- (14) 高橋亨(1989)『かぐや姫論—変化のもの』(鈴木日出男編『竹取物語伊勢物語必携』)學燈社 p.56
- (15) 文部科学省(2010)『高等学校学習指導要領解説編』pp.23-25

【引用・参考文献】

○文献

- 大曾根章介, 檜谷昭彦, 堀内秀晃他 6 名(2000)『日本古典文学大事典』明治書院
- 岡崎祥子(2009)「竹取物語研究—かぐや姫の罪と罰をめぐる—」(『岩大語文』第 14 卷) 岩手大学語文学会
- 沖浦和光(1991)『竹の民俗誌—日本文化の深層を探る—』岩波書店
- 小沢正夫, 松田成穂(1994)『古今和歌集 新編日本古典文学全集』小学館
- 片桐洋一他 4 名(1994)『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館
- 河添房江(1993)「かぐや姫—光と境界と外部」(『国文学 解釈と教材の研究』第 38 巻 第 4 号) 學燈社
- 川名淳子(2007)『『竹取物語』—一月界からの使者』(『国文学』「文学の中の月」(特集: 月光) 第 52 巻第 3 号) 學燈社
- 小嶋菜温子, 島内景二(1989)「竹取物語を読む」(鈴木日出男編『竹取物語伊勢物語 必携』) 學燈社
- 佐藤保(1992)『漢詩のイメージ』大修館書店
- 鈴木日出男(2001)『『竹取物語』の本性—異界と人間をめぐる—』(『文学』第 2 巻 第 6 号) 岩波書店
- 高橋亨(1989)「かぐや姫論—変化のもの」(鈴木日出男編『竹取物語伊勢物語 必携』) 學燈社
- 竹村信治(2002)「翁の物語としての『竹取物語』—「古典」に親しむ—のために」(『国語教育研究』第 45 号) 広島大学教育学部光葉会
- 倪錦丹(2009)「竹取物語の物語性—「月」をめぐる—」(『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書 平成二十年度海外教育派遣事業編』) お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局
- 西一夫・藤森裕治(2009)「国語教科書に埋め込まれた日本文化—『雪・月・花』と季節感—」(『国語科教育』第 65 巻) 全国大学国語教育学会
- 野口元大(1979)「解説 伝承から文学への飛翔」(『新潮日本古典集成 (第二十六回) 竹取物語』) 新潮社
- 野口元大(1979)『新潮日本古典集成 (第二十六回) 竹取物語』新潮社

林正雄(2007)「日本・欧米・中国それぞれの月感覚」(『国文学』第52巻第3号) 學燈社

堀内秀晃, 秋山虔(1997)『新日本古典文学大系 17 竹取物語 伊勢物語』岩波書店

三谷邦明(1992)『物語文学の言説』有精堂出版

渡辺秀夫(1995)『詩歌の森—日本語のイメージ』大修館書店

○学習指導要領

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説編』『中学校学習指導要領解説編』

文部科学省(2010)『高等学校学習指導要領解説編』

○国語教科書

教育出版(2011)『ひろがる言葉 五上』(小学校)

光村図書出版(2011)『国語 五 銀河』(小学校)

学校図書(2012)『中学校国語 1』(中学校)

明治書院(2015)『高等学校古典 B』(高等学校)

(あさかわ あすか 上田市立清明小学校)